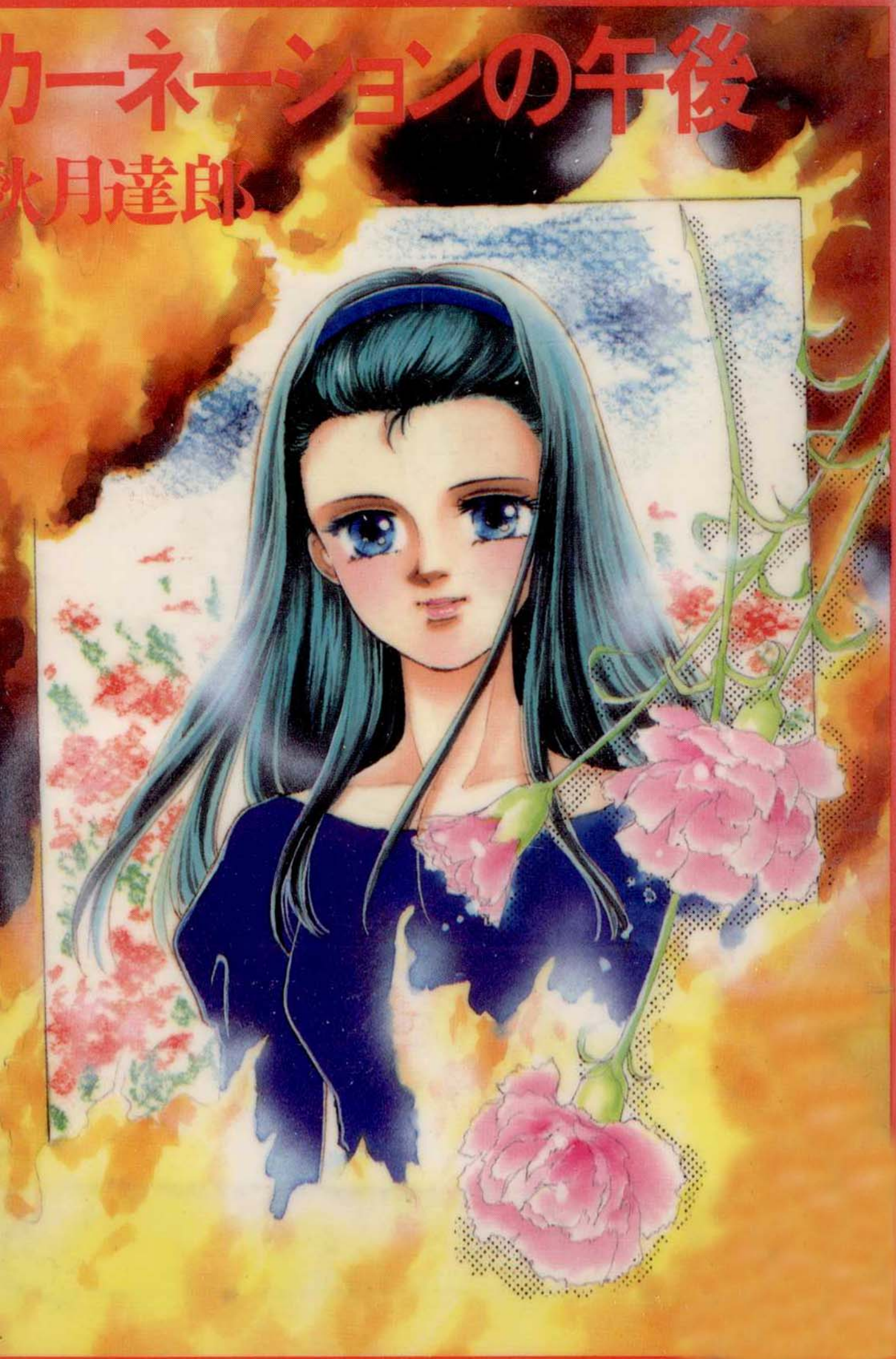
カーネーションの午後

秋月達郎



秋月達郎　あきづき・たつろう

1959年5月15日生まれ。牡牛座、O型。早稲田大学卒業後東映に入社。『スケバン刑事』『はいからさんが通る』等のプロデューサーを経て、『鏡の中の私』で作家デュー。他の著書に『鏡の中の私PART2—うしろのしょうめんだあれ—』『アルテミスの反乱—2039—』『ミルキー・ウェイ探偵団』『銀のスプラン・金のフラスク』『ユニコーン・アイランド』等がある。趣味は海外放浪＋温泉つきのスキー。調布市在住。

カーネーションの午後

秋月達郎
©Tatsuro Akizuki /Kitty Creative Inc. 1990
1990年11月30日　初版発行

発行人　**広橋　敏栄**
発行所　**株式会社　朝日ソノラマ**
東京都中央区銀座4-2-6
第二朝日ビル　〒104
振替　東京2-40311
電話　03-563-6021～3
印刷所　**株式会社光邦**
製本所　**光和製本株式会社**
Printed in Japan
落丁・乱丁本はおとりかえします

パンプキン文庫

カーネーションの午後

秋月達郎

朝日ソノラマ

目次

序章 …… 5
第一章 既視 …… 17
第二章 失踪 …… 38
第三章 霊体 …… 61
第四章 夢遊 …… 95
第五章 復讐 …… 132
第六章 転生 …… 177
第七章 嫉妬 …… 216
第八章 交霊 …… 234
第九章 水魔 …… 249
終章 …… 262
あとがき …… 267

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

【麗子像の謎解きに迫る／内部で一体化する童女二人／宿命的出会いに従順な視線

重要文化財になった大正期の肖像画『麗子微笑（青果持てる）』を残し、三十八歳で夭折した画家、岸田劉生の生誕百年にあたるのが今年である。東洋画のモナリザ像にもたとえられる「麗子」シリーズは劉生二十三歳から没年まで十六年にわたって執拗に描き継がれた、謎にも似た足跡である。劉生の、この偏執的ともいえる画業の展開は、写実一辺倒だった近代日本洋画に東洋美を注入するための生みの苦闘でもあったのだろう。（中略）劉生が長女麗子の姿とともに繰り返し描き残しているのは麗子の遊び友達だった地元漁師の娘・お松である。（中略）見比べてみると、ふたりの童女は、劉生の内部でいつの間にか一体化しているのだ。（中略）画家と童女との出会いは宿命的なものであり、劉生は「このような美を発見し化身せしめた」（土方定一氏）のである。麗子像のほのかな微笑の真意は劉生が自身の宿命に従った従順な視線そのものなのかもしれない。（中略）「世界中の画家たちが、変なものを描こうと苦心している時に、自分は美を描こうと苦心している」とかつて劉生は記している。そして、麗子像に美を求道するまなざしを託したのである】

〈朝日新聞より抜粋〉

序章

春の霞が、うすぼんやりとした陽光に、たなびいている。
あたりをとりまく樹々には、新緑の葉が芽吹き、ところどころに淡紅色や白色の花弁が、染みこむように彩りをそえている。
桃。
果てのないほど広い苑。
匂いたつ四月の気配を胸いっぱいに吸いこんで、わたしは萌えだした下草を踏んでいた。
彼方には山があるのか河があるのか、ただよう春霞のせいで、まわりの風景は、よくわからない。ただ朧な霞をとおして空を見上げれば、心地よい風が、しだいに霞や雲を流しているのが、眼にはいってくる。
ふりかえれば、古くて大きな民家が見えている。
玄関の軒下には〝葦原〟と達筆で書かれた表札が掛かっている。
広々とした桃園をもった、おとうさんの実家。
そう。

これは、遠い過去の――ななつくらいの記憶――。

――でも変なの。おばあちゃんの家、瓦の屋根なのに、いま眼の前に見えている屋根、藁葺だ。どうしてなんだろ。あの民家、ほんとうにおばあちゃんの家なんだろうか。

〝こっちへ、おいで〟

誰かが、ささやく。

〝ほら、ここまで、おいで〟

瞳を凝らして、遠くを眺めた。

桃の木陰に誰かいる。ぐにゃりと腰の曲がった、薄汚い服を纏った……おじいさん。杖をついてる。白髪はみじかく刈りこまれ、裸足のつまさきには綻びた鼻緒の下駄がひっかかってる。横顔しか見えないけど、不精髯まで白髪まじり。

「わたしを呼んだの、おじいさん？」

そっと訊く。

おじいさんは、こっくりとうなずいた。

「ここ、おばあちゃん家の庭なんだよ。どうして勝手にはいってるの？」

微笑むばかりで、答えてくれない。

「おじいさん、どこの人――」

その瞬間、霞をつらぬいてサイレンが大きく鳴りひびいた。

かんかんかんかんっと半鐘が応じる。
「なにっ、これ？」
空を仰いだ。
さっきまで靄(もや)っていた空に、いきなり入道雲が、ぐおんぐおんと湧きあがり、その雲間をついて巨大な機影が、プロペラ音もけたたましく、編隊をくんで接近してくる。
「なんなのぉっ、あの飛行機っ？」
指さして叫ぶ。
そしたらおじいさん、わたしを見て、こう言った。
〝ほぅ。あれが視(み)えるのかね？〟
「だって、そんなの――」
――あたりまえじゃないって言おうとした途端。
ひゅるるるっ、ひゅるるるぅっと飛行機のお腹から、なにか真っ黒いものが落下してきた。
いきなりの爆発。響く炸裂音。漂う硝煙。燃えあがる焔。渦巻く突風。舞いあがる黒煙。馬のいななき。牛の悲鳴。阿鼻叫喚の声、声、声。
「ひぃっ」
ひきつったような叫びをあげて、わたし、その場にしゃがみこんだ。
戦争中のドキュメンタリー・フィルムを観ている――ううん――体験しているような感覚。

一挙にあがる気温。地震のような地響き。肉の焦げる匂い。
思わずこみあげる吐き気。
「こ、これって……!?」
塞いだ両手から、おじいさんを見上げる。
「――な、なにが起こって――」
慌ただしい跫音。桃園の樹々をかきわけて、防災頭巾にモンペ姿のおばさんたちが、手にバケツを抱えて駆けてくる。ひとりのおばさんが、おじいさんの杖をひっかける。おじいさんの体、ぐらりと揺れた。
「あぶないっ」
咄嗟に両手を差しだした。おじいさんの体重が、ぐぐっと掛かる。
〝すまないね〟
おじいさんはわたしの両手をそっと戻しながら、寂しそうな笑みをこぼし、すうっと人差指を延ばした。その指の動きにそって、うしろをふりむく。
「おばあちゃん家がっ！」
――燃えている。三間の縁側に火の粉が振りそそぎ、もう軒端は紅蓮の炎につつまれている。必死になってバケツ・リレーの消火作業をしてくれているのは、さっき、おじいさんにぶつかった防災頭巾のおばさんたち。藁葺の屋根が、ぱちぱちと音をたてて、燃えさかっていく。北

裏の台所あたりで、なにかに引火して、ばぁっん、と爆ぜた。風向きが変わって、屋根の火藁をこちらへ飛ばしてくる。もくもくとあがる黒煙は、単純な消火作業などものともせずに、天へむかって立ちのぼってゆく。

その真っ黒な幕を斬りさいて、プロペラのついた小型戦闘機が低空飛行のまま飛びこんできた。雷鳴のような機銃掃射。絶叫と同時に腰をひく。

「おじいさんっ！」

一瞬の出来事。それは忘れられない映像として、十年間ものあいだ、わたしの瞼にこびりついている。たてつづけの銃撃音に、杖もろとも、おじいさんの身体は宙へ飛び、次の瞬間には、脳天を横切った鉄の兵器によって、おじいさんの頭は、粉々に撃ちぬかれていた。四方八方へ脳漿は飛び散り、砕けた波のような血しぶきが、白日のもとに、ぱあっと広がった。

声も失ったような絶叫とともに、わたしは地面にしりもちをついていた。そして、わなわなと顎を震わせて、おじいさんの体まで這いよった。おじいさんの屍体に、首はなかった。胃液が咽元までこみあげる。白く渇いた土が、おじいさんの首からどくどくと溢れだした真っ赤な鮮血を吸いつくしていくようだ。

「……あ……あ……」

思考はまったく停止して、どんな台詞を喋ってよいやら、そのときのわたしには、なにも考えつかなかった。こらえきれず嗚咽をもらしたわたしの肩を、ぽんと誰かが叩いた。涙でぐち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

やぐちゃになった顔を回す。

「きゃぁぁぁっ」

おじいさんが、そこに立って微笑んでいた。

反射的に、地に転がった屍体へ視線を飛ばす。首を失ったおじいさんは、やっぱりまだ、そこに倒れている。でも――。

〝怖がることは、なにもないよ〟

こんこんっと杖で地面を叩きながら、おじいさんはまた微笑んだ。

「でも……でも……」

〝ほぉら。気を落ちつかせて、ゆっくりあたりを見直してごらん〟

おじいさんの声、不思議な安心感をもっていた。わたしは言われるままに、おばあちゃんの実家へ視線を戻した。いつのまにか火は消えている。ううん、焼けてしまったはずの屋根も、その場しのぎとはいえ、修理はとうに終わっている。屋根のむこうがわに湧きおこっている入道雲だけが、さっきとあまり変わりはないように思えた。

みぃんみぃんと、いまを盛りに、蝉が鳴いている。

と、庭に何人かの人がひざまずいている。開けはなたれた縁側からは、あまり感度のよくないラジオ放送が流れている。雑音混じりのラジオの声がなんと言っているのか、わたしの耳では、うまく聴きとれない。

うっ……ううっ……と頭を垂れた人たちが嗚咽を漏らす。
誰なんだろう、あの人たち。
ごしごしと両目をこすって眺めてみる。
「……おばあちゃん？」
それもまだ、ずいぶんと若い。それじゃ、あの背中におぶさっている赤ちゃんは……おとうさん？……なんか妙な感覚に、わたしは包まれていた。
おばあちゃんの隣に白髪まじりのおばさんが立っている。
もしかして、ひいおばあちゃん――その両手にひとつ、額にはいった写真が抱かれている。
斜めに架けられた黒い帯。
――遺影。
「……おじいさん……の？」
わたしは瞳をおじいさんに転じた。
「それじゃあ……おじいさんは……わたしの……」
おじいさんは、こっくりとうなずいて微笑んだ。
〝いいかな、水穂ちゃん〟
ミズホというのは、わたしの名前。
〝水穂ちゃんは、わしを視ることができる。同時にまた、わしの死んだ前後の事柄も視ること

ができる。だけどね、その力は滅多に使ってはいけないよ。いや、できるなら使わないほうがいいね。大きくなるにつれて、少しずつ忘れてゆくんだ。でないとこの先、視なくてもよいものまで視なければならないようになるからね〃

おじいさんはわたしをじっと見つめながら、ひとことひとこと言い聞かせるように言葉をつないだ。わたしはなんの抵抗もなく、おじいさんの言葉を受けいれていた。

〃さあ、もとの世界へ、おかえり〃

「そこでね、ふうっと眼が覚めたの」

ひそひそ声で、隣の席に腰掛けた親友のヒロミ——島博美(しまひろみ)——に話しかける。

「で、そのとき、どこにいたの。やっぱり、おばあちゃんちの桃園？」

興味津々で、博美が尋ねてきた。ぽっちゃりとした頬のうえに、小さくて丸い眼が乗っている。いつもと同じように、可愛くって、愛想のいい表情。

「うん。蟬の声も入道雲もなくなって、桃の花だけが、咲いてた。小学校の入学式があってすぐの頃よ。それ以来、ひいおじいちゃんの幽霊なんて視たことないけど——ううん——どんな幽霊だって、視たことない」

「ほんとうに幽霊だったのかしら？」

「たぶん」

そう呟くと、わたしは三階の窓から、南の空を仰いだ。
「でも、むっつか、ななつの頃のことでしょ。桃の木陰でうたたねかなんかして――」
「そんなことない。なんて言ったらいいのか……ちょうど、夢と現実の狭間にいたような……そんな感じだったけど、まったくの夢じゃなかった」
「ふぅん」
博美は半信半疑で、鉛筆をくるくると回すと、机に片肘つきながら言った。
「桃……桃園かぁ。あたしは、どんな花に包まれて、幽霊を視るんだろうなぁ」
ぽつりと言った博美のそんな台詞が、妙にわたしの印象に残った。
――どんな花に、つつまれて――。
「だけどねぇ、水穂。幽霊なんて視ないにこしたことないと思うよ、やっぱり。それが、たとえ、ひいおじいさんの幽霊でも――」
「こら、そこっ。葦原、島っ」
ハスキー・ボイスが飛んだ。理科室の教壇には、ポニー・テールに結んだ女子大生まがいの女性教師が、小麦色の肌も誇らしげに、チョーク片手に立っている。栗田真理子（くりたまりこ）、二十三歳。天文部の顧問にして、わたしたちの副担任。
「葦原水穂」
「は、はいっ」

がたりと立ちあがった。そう、わたしは、ここ東京都調布市にある私立・深大寺学園の一年生。ついこのあいだ誕生日を迎えたばかりの十六歳だ。自宅は調布市のはずれにあって、おとうさん、おかあさんとの三人暮し。おとうさんは、吉祥寺にある某女子大で教鞭をとっている。ちょっぴり偏屈だけど、まぁ、専門が民俗学なんてわけのわからない学問だから、それもしかたない。

「いまの、アタシの説明、くりかえしてみな」

「えっ。あ……その……」

真理子先生、にっこりと笑って、

「地学、馬鹿にしてんな？」

「そ、そんなこと……」

答えにつまる。真理子先生、ふだんはとってもいい人で、頼りになるオネェサンって感じなんだけど、こと授業だけは厳しくなる。名前だって、途端に呼びすてなんだもん。でもまぁ、そんなところが人気の秘訣なのかもしれない。

「地学ってのは真剣にやったらおもしろいんだぞぉ。天気予報だって、簡単にできるようになるんだから。ま、大学にはいってからでもいいから、少しくらい専門書かじってみな。んじゃ――司馬（しば）」

「はい」

ちょっぴり太めの男子生徒が、あわてて立ちあがる。司馬孔明。わが深大寺学園一年生きっての秀才なんだけど、ちょっと見には、とてもそう思えない。

「アタシの説明、聴いてたか？」

「大陸移動説でしょ？」

「そ」

「いちおう聴いてました。でも、真理子先生。大陸移動のときに、中心となる固定された大陸を考える場合は、インド大陸ではなくてアフリカ大陸だと思いますけど。そうじゃないとインドが漂流してヒマラヤを形造ることが不可能になります。ちがいますか？」

「う」

こんな場合、孔明くんのツッコミは鋭い。

「もう少し、しっかり予習してから授業をしてくれないと、受験科目に地学を選んでいる生徒の迷惑になります。それにつけくわえるならば、ウェーゲナーはスイス人ではなくてドイツ人です。生存年月は、西暦一八八〇年から一九三〇年で――」

「わかった。ごめん。わかりました。アタシが馬鹿です。すいません」

真理子先生、にやりと笑う孔明くんを退けて、真っ赤になった。

「つたくぅ、教師の権威も地に堕ちたぜ。なんで、あんたみたいな人間が生徒やってんだよぉ。うん？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com